

# Berlin Report

## November 2020

### CONTENTS

- \* Project 1: Luigi Colani & Jugendstil/ Exhibition
- \* Project 2: Living the City/ Exhibition scenography

## 1. Luigi Colani & Jugendstil

### Project Overview

昨年、91歳で亡くなったベルリン出身のデザイナー、ルイジ・コラーニ（Luigi Colani）。人間工学（Ergonomics）と空気力学（Aerodynamics）をベースにした流線型のデザイン。一世を風靡したコラーニの近未来的なデザインをユーゲントシュティール（Jugendstil/Art Nouveau）と比較し、新たな文脈で捉え直してみようという実験的な展覧会が、ベルリンの工芸美術館 Bröhan Museum で 2021 年 5 月まで開催されている。

展覧会会場では、コラーニがデザインした家具やデザイン画などがユーゲントシュティールのデザインと対話するように並べられ、自然の中にある有機的なフォルムが酷似していることがよくわかる。

これまでコラーニのデザインというと、プラスチックという新しい時代の素材を得て生まれた、色鮮やかや艶やかさ、未来的な印象が強かったため、今回の比較はとても刺激的だ。

コラーニは 1970 年代にこの美術館を訪れ、膨大なユーゲントシュティールのコレクションを見学したことがあったのだという。1977 年、コラーニは「ユーゲントシュティールの復活」を打ち出す。

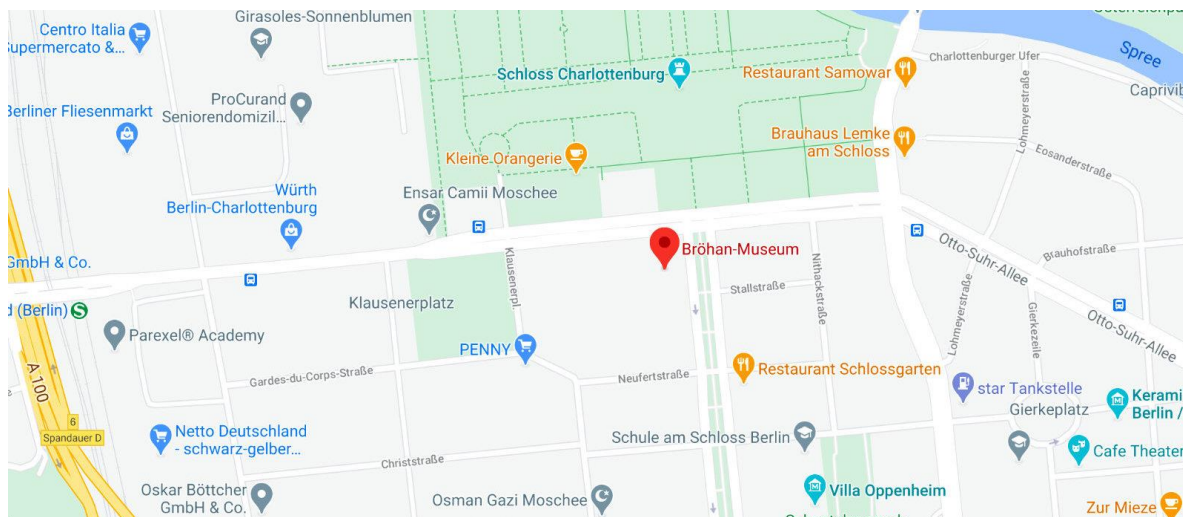
また興味深いのは、展示の最後にはバウハウスデザインが比較として置かれていることだ。廊下のようにつながっている空間を生かして、バウハウスデザインからユーゲントシュティール、コラーニまでを来場者が流れのように一望できるよう展示デザインされている。実は、この工芸美術館はバウハウスデザインも数多く所有し、バウハウスのその機能的なデザインがいかにして生まれたか、後世への影響をも研究、検証している美術館でもある。

「もうバウハウスの時代ではない」というコラーニの言葉を壁に描き、来場者に問いかける。未来的なデザインとは、どういうものなのか？と。

### Project Details

1. Type of Business : exhibition
2. Open Date: 29/09/2020 – 30.05.2021
3. Location: Bröhan-Museum, Schlossstrasse 1a, 14059 Berlin
4. Size: 1000 m2
5. Dr.Tobias Hoffmann (curator) Katleen Arthen (exhibition design)

### LocationMap





手前：コラーニが 1979 年に Villeroy & Boch のためにデザインした洗面所用の鏡台。

奥：1900 年代アールヌーヴォーのミラー付きタンス。



コラーニが 1973 年に発表した人体工学的にデザインしたチャイルドチェア Zocker。時代を反映するデザイン。





隣が目に入る空間を生かし、開口部からそれぞれのデザインが垣間見えるよう展示。自然と比較できる。





直接的な関係性が明確なオブジェは並べて展示。コラーニ語録「俺は彫刻家だ。しかもそんな悪い彫刻家じゃない」



「バウハウスはアウト。これ以上アウトなものなんてないくらいだ」というコラーニの言葉とともに、バウハウスデザインを展示。

## 2. Living the City

### Project Overview

1941 年、ベルリン市の中心に作られたテンペルホーフ空港 **Airport Tempelhof**。ナチスがベルリンを掌握していた時代に作られた大きな窓、高い天井を持つ建築は独特の威圧感があるが、ディティールはレトロで味があり、2008 年に惜しまれつつも閉港となった後も、展覧会や見本市などに引っ張りだこだ。文化財保護下にあり、現在は 300 ha の滑走路が一般開放され、巨大な公園としてベルリン市民の憩いの場となっている。特に今年の 3~4 月のロックダウンの間は好評で、広々とした空間が先の見えない状況のストレスを和らげてくれたようだ。

バゲージクレームの機械などが残る旧エントランスホール空間で、9 月から連邦建築・国土省による都市計画の展覧会「**Living the City**」がスタートし、好評だ。

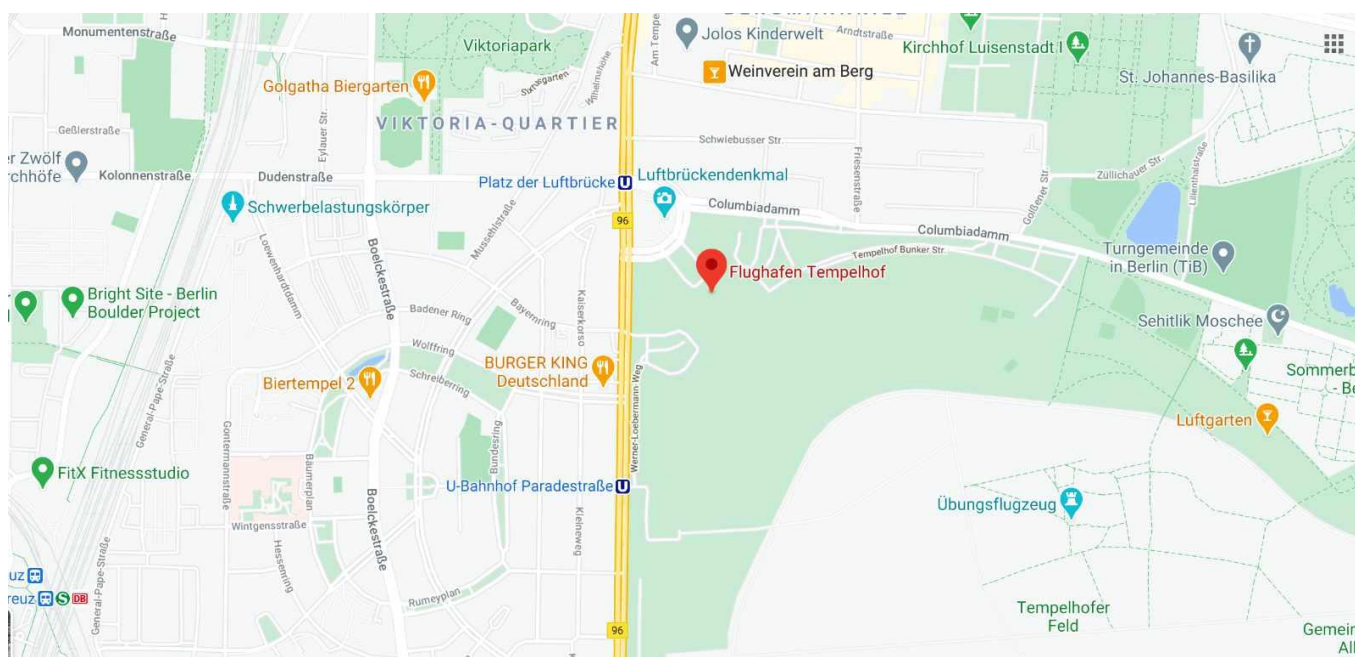
巨大な空港の空間の中に工事現場の足場を大きく縦横無尽に組み立て、キオスクのようなスタンドを立てたり、ネオンサインを輝かせたり、テントのようなものを貼って映像を見せたり。来場者は、歩き回り、覗いてみたり、見上げてみたりと、「市民」として街に暮らす一個人として、積極的なアプローチを誘われる。

まちづくりに欠かせないのは、そこに暮らす人々一人ひとりの力、参加。生きる場所、生活空間としての街をどうデザインしていくか、個人の日常をどう既存の街の中に取り入れていくかというプロジェクトのアプローチが反映されたセノグラフィーは高い評価を得ている。

### Project Details

1. Type of Business : exhibition
2. Open Date: 25/09/2020 – 20.12.2020
3. Location: Flughafen Tempelhof Columbiadamm 10, 12101 Berlin
4. Size: 50 projects
5. Design: TheGreenEyl(design, scenography) Lukas Feireiss, Tatjana Sschneider, TheGreenEyl(Curatorial team)

### LocationMap

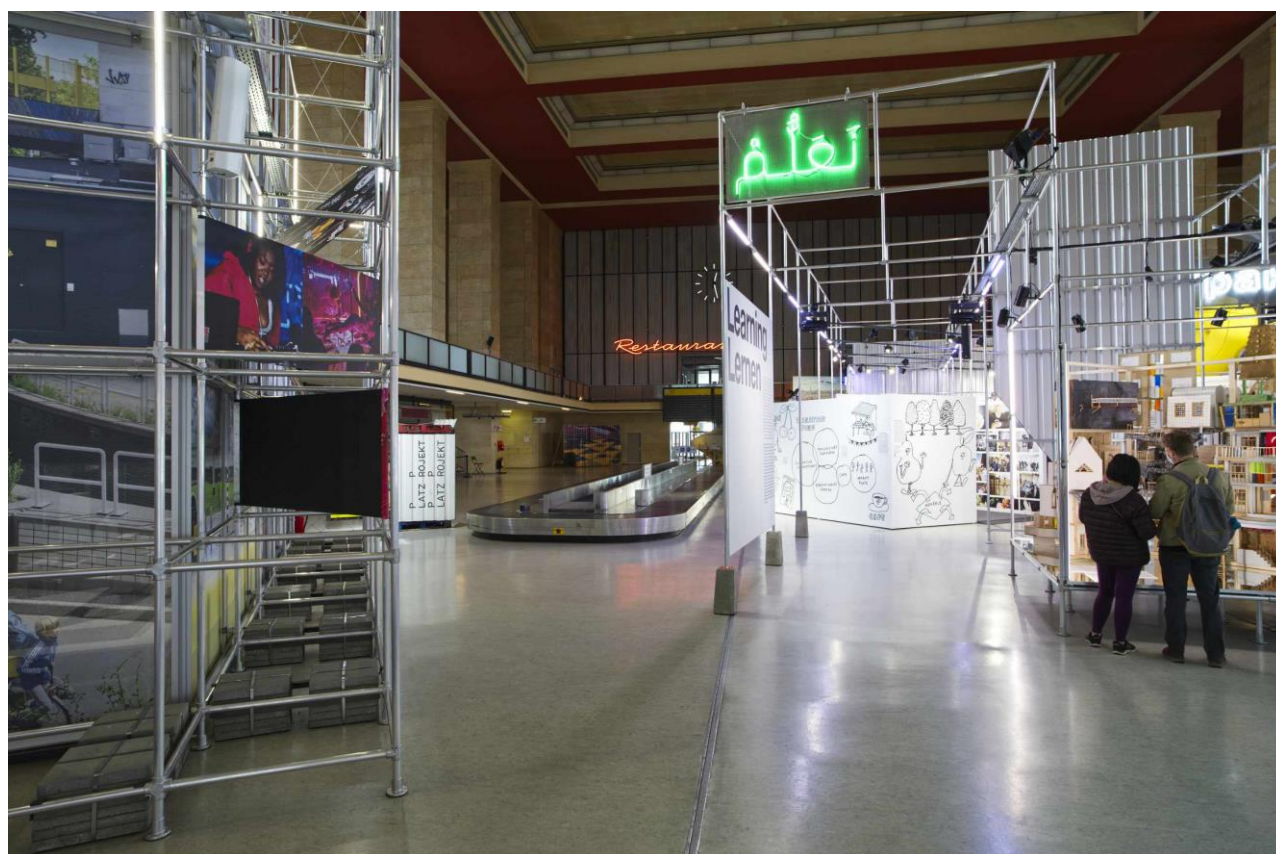






バゲージクレームのベルトコンベアを生かして視線を誘導。

金属の棒を組み合わせた展示ごとの間仕切りがまるで簡易的に作られた街のようだ。



空港の中に残るネオンサインが見える場所にネオン看板。既存の空間と素材やデザインを呼応させているのもポイント。





映像は映画館のように作られた空間で見せる。

工事現場などで使われるビニールの防塵ネットのようなものに街の風景をプリントして張っている。



50 のプロジェクトそれぞれの展示空間の間にある空間には、ベンチが置いてあったりして、本当に街のようで面白い。